体育心理学研究会会報

曲り角

昭和 54 年 10 月 第 1 号

国際スポーツ心理学シンポジュームの記

日本大学　藤　田　厚

去る1979年 9月 7日に、東京都三田３－12－12にある笹川記念館において、日本スポーツ心理学会第６回大会と組合せて、国際スポーツ心理学シンポジュームが開催された。外国から招待された演者は、国際スポーツ心理学会会長 M.Vanek（チエコスロバキヤ，チャールズ大学教授）、同事務局長 H.Rieder（西ドイツ，ハイデルベルグ大学教授）、同理事会メンバー、J.Salmela（カナダ，モントリオール大学教授）、R.Singer（アメリカ，フロリダ州立大学教授）であり、日本からは松田岩男（筑波大学教授）がこれに加わった。司会は末利博（京都教育大学教授）と藤田厚（日本大学教授）が担当した。

この国際スポーツ心理学シンポジュームには以上の４名の招待演者の外に、外国からは D.Harris（アメリカ）、G.Olszewska（ポーランド）、N.Fhudadov（ソ連）A.Sedov（ソ連）の４人の外に台湾から６人が参加していた。

この国際スポーツ心理学シンポジュームをわが国で開催することになったのは、去る、1976年のモントリオールオリンピックの際、７月11～15日にケベック市で開際された、身体運動科学会議1976（The international congress of physical activity science 1976）、で VanekとRiederから申し込みを受けたからである。国際スポーツ心理学会では名誉会長、会長、副会長、事務局長の４人の外に世界各国からの代表12人が理事会メンバーを構成しており、これらの理事たちが回り持ちで毎年理事会の開催地を世話し、開催国は航空運賃以外の一切の滞在費を負担することになっている。わが日本スポーツ心理学会からは、松田を代表として理事会に送ってあるので、たまたま、カナダの国際会議に出席していた私を通じて公式の申し込みを受けた訳である。

日本スポーツ心理学会としては、多額の費用の要ることでもあり、当惑したが、世界におけるわが国の立場を考えて、寄付金を集めるなどの方策を構ずるにしてもとに角この開催を引受けようということになった。それで、1976年の12月に公式の回答を送り、更に、翌年の1977年10月 3～ 9日にチエコスロバキヤの主都

プラハで開催された、国際スポーツ心理学会第４回世界大会の際の理事会で1979年９月上旬に、国際スポーツ心理学会理事会を東京で開催し、その際に、日本スポーツ心理学会第６回大会と組合せた形で国際スポーツ心理学会シンポジュームを開催し、上記理事会のメンバーのうち若干名を演者としてお願いする旨を申し入れて、了承されたのである。

このようにして、1979年の９月７日の午後２時から国際的なシンポジュームが開催されたが、演者の講演は次のようなものであった。Vanek：The actual psychic and the possibility of its regulation, Rieder：Improving athletic counseling through psychology, 松田岩男：スポーツマンの達成動機について、Salmela：Sport psychology, sport science and sport performance, Singer：Research in sport psychologyであった。

当日は演者の講演内容を、予め送られて来てあったテキストによって日本人参加者のために翻訳した資料を用意し、外国人には英文の資料を配布して、講演の際は末利の司会で、後半の討論は藤田の司会で、それぞれの演者の発言と参加者の発言には、栗本閲夫(順天堂大学)、波多野義朗(東京学芸大学)、池田並子(筑波大学)、猪俣公宏(名古屋大学)の各氏に通訳をお願いして、シンポジュームが進められた。

紙面の都合で、講演および討論の内容を紹介できないのは残念であるが、100名余りの参加者との間で盛んな討論が展開し、シンポジュームは全体として成功のうちに終ったことを付記しておく。

運動心理学談話会について

名古屋大学　猪　俣　公　宏

この会は日ごろ、中京地区で体育、スポーツあるいは、身体活動の心理学的研究に興味を持っている者が、お互いの研究領域を紹介しながら相互に知識を深める勉強会を持ちたいという要望の結果、生れたものです。略して『ウンシン会』と呼んでいますが、まだ産声をあげたばかりで特別な会則も会費もありません。約15名が月１回ほど集まり、毎回、原則として１人が発表者になり、その後、取りあげたテーマを中心に自主討論をするようにしています。以下は今まで発表されたテーマとその要望を、発表順にそれぞれのスピーカーにまとめてもらったものです。

米国におけるスポーツ・体育の心理学的研究の流れと問題点

名古屋大学　猪　俣　公　宏

米国での主な研究の系譜と特色について述べられ、その中で、実験心理学的な研究が主流をなしてきたため法則的事実の検証に力が注がれ、応用的な面の発展がソ連、東欧などに比べて遅れている傾向が指摘された。

英国の Universty of Reading における心理学的研究について

南山大学　寺　田　邦　昭

視覚研究を中心的テーマとして約1年半にわたる研究生活を送る中で直面した日常生活、あるいは研究遂行上の問題にふれ、さらに手がけた実験のうち特に、Cancelation theory に基づいた動作と視覚野の stabilityについて具体的な説明を加えた。（この研究は、日本体育学会第30回大会で報告する予定である。）

達成動機研究の動向

名古屋大学　西　田　保

達成動機研究の流れと動行について紹介された後、（1）達成動機の概念、（2）達成動機の測定法、（3）Atkinson.J.Wの達成動機理論とその検証実験、（4）達成動機に関連する諸研究（起源及び発達、学業、遂行水準、親和動機、目標設定行動、根気、成功回避動機、原因帰属理論、達成動機づけ訓練）について発表がなされた。その後、達成動機と運動との関係について討論され、両者を媒介する要因として個人の持つ「価値感」の重要性が指摘されるとともに、達成動機理論の身体的トレーニングへの応用可能性も示唆された。

Bandura のモデリング理論の概観と運動技能学習への応用

名古屋工業大学　伊　藤　政　展

主たる内容は、まず、教育機器の導入によって運動技能の学習を効率化しようする試みが増加してきているが、これらの学習過程に影響をおよぼす要因の分析を行ううえで、モデリング理論は極めて有効な理論であることを指摘し、特にモデリング現象を支配する4つの下位過程についての詳細な説明を行った。次に、具体的に運動技能の観察学習について検討を加えた Landers etal の文献（J. Mot.Behav.,1973）を参考に、観察困難な運動課題の学習についてもこの理論が適用されるかどうかといったモデリング理論の効用と限界に関する討論がなされた。

Eysenck のパーソナリテイ理論の運動場面への適用について

中京女子大学　岡　沢　祥　訓

Eysenckのパーソナリテイ理論における向性（内向一外向）には内向者が外向者よりも興奮しやすく、反応禁止の蓄積がされにくく条件づけられやすいという生物学的基礎が存在する。この Eysenck理論の妥当性について討論された後、以上の理論から導かれる問題である、（1）運動特性、（2）感覚刺激に対するトレランス、（3）競争効果と向性の問題について討議がなされた。ここでは実験が行なわれた状況によって異なった結果が得られているという問題があり、Eysenck 理論には適用の限界が存在することが指摘された。

研究の発表は深さと拡がりの座標上で展開されるわけですが、特に学際的な領域では両者のバランスをとるのが大変難しく、我々の悩みの一つでもあります。

本会が少しでもこうした悩みの解決に役立ってくれればと考えています。その為にも地域や狭い意味での専門などの閉鎖性にとらわれることなく会を進めていきたいというのが全員の考え方です。興味をお持ちの方はいつでもご参加ください。

1980年代を展望する体育心理学研究の課題
——実践と理論の統一をめざして——

専門分科会事務局　日本体育大学　円　田　善　英

体育心理学とはなにか。体育学の構造の中に体育心理がどのように位置づけられ、認識されているのであろうか。それをふまえたうえで、あらためて体育心理とはなにかを問い直すことは、1980年代の体育心理学研究を展望するうえで、きわめて基本的な問題ではないだろうか。周知のように、体育心理が学問・研究の対象であることは、体育・スポーツにかかわる子ども・青年の身心を発達させる科学を、どのようなものとしてとらえるのかという問題でもある。

ところで、これまで一般の諸科学における実用主義や実証主義といわれる科学観の問題には、両者の固有の性質として、いつも「なんのための科学か」ということを問題にしなかった。

そこで、私は、まず体育心理学を研究していく出発点として、体育・スポーツの実践現場では、なにが問題になり、どのような研究が期待されているかを明らかにすることが重要であると思う。そのなかで、本学会の体育心理分科会が正面から応えていく問題や課題はいったいなにかを、究明することであると私は思うのである。なぜなら、体育・スポーツの実践の問題点が鮮明になり、それに応えるための研究は体育心理学の研究成果が十分なされていないところに、実践と理論の分裂が生じていると考えるからである。

この問題を解決し、体育心理学の研究を正しく発展させていくためには、少くとも次の4つの問題について検討することが必要であろう。

第1は体育心理学研究の独自の役割と固有の課題を明らかにすること。

第2は実践と理論の相互関連のなかで、体育心理の内容とその質を問い直していくこと。

第3は、体育・スポーツの実践における体育心理学的研究の位置づけと、その根拠を鮮明にすること。

第4は、体育心理学はそもそもなにを明らかにする科学なのかを問うと同時に、科学としての体育心理学の構造を究明していくこと。

もし、このように問題を考えることができるとするなら、本大会のシンポジュームのテーマでは、第2の問題と関連して、体育心理学研究における実践と理論との結合のメカニズムを明らかにすることが、最も重要な課題ではなかろうか。さらに、これを実践と研究の関係について述べるなら、研究(実験)は、認識の一般化の過程であるが、実践は、一般化された認識を実践に適用して、現実(対象)

を変革する行為であるがゆえに、これは特殊化の過程である。しかしながら、その両過程は本来、密接不可分の統一体としてとらえるところに、現実に生きている人間の人格発達に結びついた研究が可能になるのである。ここには、体育心理学の研究課題が、認識と行動のメカニズムを究明せざるをえない重要な意味をみいだすことができる。そして、体育心理に関する認識と行動の追究は、じつは身体及び運動の能力・発達・学習の問題を明らかにしていくことでもある。

さて、本大会のシンポジュームのテーマは「運動学習研究の諸問題」―理論と実践のかかわりあい―である。末利博氏(京都教育大学)は、その提案理由のなかで、「研究が体育の場で検証され、それが研究にフイードバックするといった研究と実践のダイナミックに機能し合う」ことの重要性を指摘されているが、この点大いに注目されるところである。

したがって、本大会のシンポジュームは、末利氏の提案を回転軸として、松田岩男氏(筑波大学)、阪田尚彦氏(岡山大学)、千獣忠至氏(東教大附属桃山小学校)の三氏から、ユニークな問題提起がなされているので、これを契機に1980年代の体育心理学研究の方向を明らかにしていきたいものである。

会員の移動(昭和54年10月1日現在)

(1) 新入会員

山下博(順正短大) 〒701―02 岡山市山田1―136

寺田邦昭(南山大学) 〒463 名古屋市守山区川字東山 2901

武田徹(中京大学) 〒468 名古屋市天白区天白町平針向ノ山 1685―16

円田善英(日体大) 〒214 川崎市多摩区生田 8601―19

(2) 住所及び勤務先変更

池田二三夫(広島大) 〒735 安芸郡府中町本町 2―10―4

石井源信(中京女子大→東京工大)

今村義正(東海大) 〒228 相模原市上鶴間 5―6―1―209

岡沢祥訓(日女体大→中京女子大)

小黒ウタ(奈良教育大) 〒630 奈良市法蓮町佐保田 596―3

海野孝(東京女子体育大→筑波大) 〒300―31 新治郡桜村並木 2―114―202

賀川昌明(お茶水女子大附属中・高等学校) 〒175 板橋区成増 1―5―11 相互マンション

笠井達哉(日本大大学院→国士館大) 〒194 町田市木曽町 220―1―2―103

工藤孝義(東北歯大→福島大) 〒960 福島市東浜町 19―19 東浜ハイツ1―2号

久保玄次(都立足立高等保母学院→愛媛大)

北岡和彦(順天堂大学院→武蔵野女子大) 〒189 東村山市萩山 4―4―17 田中荘

小林篤（名古屋大総合保健体育科センター→奈良女子大）〒630 奈良市北小路町奈良女子大宿舎

阪田尚彦（岡山大）〒700 岡山市津島中 1—3RD—504

千駄忠至（京都教育大附属桃山小）〒612 京都市伏見区奉行前町桃山合同宿舎 123 号

竹信武（東京工業高）〒243—02 厚木市鳶尾 1—8—10

調枝孝治（広島大総合科学部）〒739—03 広島市瀬野川町中町 850—25

寺本キミヨ（愛教大→名古屋自由学院短大）〒453 名古屋市中村区二瀬町 1—2 千成ハイツ 507号

兵頭寛（愛媛大）〒790 松山市桑野町北吉井 901 愛大宿舎 243

麓信義（東京大大学院→弘前大）〒036 弘前市大字松原東 3—15—13 左藤住宅 C 号

南貞己（埼玉大→鹿児島大）〒890 鹿児島市鴨池 1—57—9

米川直樹（東京教育大大学院→山口女子大）〒753 山口市芝崎町 9—16 コーポラス芝崎 2 号室

和田尚（大阪大）〒560 藤井寺市春日丘 3—3—13

お知らせ

1．本年度の体育心理専門分科会の総会を、大会第1日目（10月11日）のシンポジュームのあと開きたいと思っています。ぜひ多数のご参加をお願いします。

2．本年の大会論文集の中でシンポジュームの松田岩男先生の原稿が大変読みづらくなっています。この原因は本事務局のミスによるものですので、当日シンポジュームの際、鮮明なものを配布したいと考えています。

3．「住所変更」のコーナーをみておわかりのように所属や住所の変更が多く、新しい会員名簿の作成が困難となっています。つきましては「変更」のある方は大会当日にでも事務局の西條へお知らせ下さい。

体育心理学研究会会報
「曲り角」
昭和54年10月1日発行
代表 松田岩男
編集 長田一臣
円田善英
西條修光
連絡先 東京都世田谷区深沢 7—1—1
日本体育大学体育心理学研究室内
体育心理専門分科会事務局
電話 (704) 7001 (内) 278

体育心理学研究会会報

曲り角

昭和 54 年 10 月 第 1 号

正　誤　表

頁	行	誤	正
1	右、上から 3	東京都三田	東京都港区三田
1	右、下から 1	主都	首都
2	左、下から 9	約15名が	約15名の会員が
2	左、下から 8	自主討論	自由討論
2	左、下から 7	要望	要約
3	左、上から 9	流れと動行	流れと動向
3	右、上から13	との関系について	との関係について
3	右、上から18	効率化しよう	効率化しようと
3	右、下から 5	向性の問題	向性の関係
3	右、下から 5	について討義	について討議
3	左、下から 2	研究の発表	研究の発展
3	左、下から 2	の座標上で	の2座標上で

追加　（「お知らせ」のコーナーに、4番目の項目として）

4．「体育学研究」の編集委員長として松田岩男（筑波大）、審査員として末利博（京教大）、平田久雄（東京大）、加賀秀雄（筑波大）の各先生が体育学会の常務理事会で決定しました。